

ちいさないのちの祭り顛末記

大鹿村 田村寿満子



↑千代田湖畔の会場(写真提供…おえまさのり)

私が祭りに参加し始めたのは、'87年の上村らびそ高原の「隠魂(おに)祭り」だった。その祭りがきっかけで、翌年富士見パノラマスキー場で「いのちの祭り」が開催され、それから毎年どこかで祭りが開催されるようになった。私はどちらかと言うと、キャンプ生活でいつものように子どもたちにご飯をつくったり、おしめを手洗いするのが大変に思えて、せいぜい泊二日のショート参加か、留守番家族のほうだった。そういうわけで祭りには初心者マークだったので、イメージとしては年二回地元で主催している陽だまりマーケットのキャンプ版くらいの軽い気持ちで呼びかけたのだが、「祭り仕掛け人」として今までに経験することのなかった様々な「困難」(?)に出くわすことになる。

はじめのハードルは、会場として狙いを定めた千代田湖キャンプ場の使用許可をとることだった。千代田湖キャンプ場は山梨からも大鹿からもほぼ中間点の入笠山のふもとにある小さくて素朴なキャンプ場だ。近くに守屋山という聖山があり、いかにも古くから人々が参拝してきたと思わせる守屋神社もある。以前千代田湖ではひょうコマが開かれ、いつかここで祭りをしたいねと話したこともある。しかし、目と鼻の先にキャンプ場とは全く関係ない民宿があり、会場から出るであろう音楽や話し声までも筒抜けの距離にある。そこでまず民宿に話をしに行ったところ、既にそこには千代田湖の持ち主の保科(ほしな)さんが私たちを待っていた。「どんなことをやりたのか?」と聞かれ、返事につまる。普通の人たちに祭りを説明するのはなかなか難しい。陽だまりマーケットのチラシを見せて、15年こんなことをしているが、それをキャンプ形式でしたいと言うと、「そりゃ度胸のあることだな」と保科さんがにやりと笑う。幸運なことに同行した地元スタッフの一人が保科さんと顔見知りだと判明し、話が一気に好転する。おかげで保科さんと民宿の人に良い感じで了解してもらえたので、まずはひとつクリア。キャンプ場の管理をしている高遠町役場の担当職員からも準備から片づけまでの6日間貸切りの許可をとることができた。これはひとえに地元スタッフのお蔭である。

スタッフは20代から60代(私)まで各世代がいて、ミーティングはだいたい現地でしたので、それぞれが車で1時間の距離を何度も手弁当で集まっては、あれこれ楽しいおしゃべりをしながら決めていった。スタッフの自発的な動きがパッチワークのようにつながり、広がり、形になっていくのが分かった。たとえば、使用者が多いと水洗トイレが詰まるから「トイレトペーパーは流さず箱に入

れよう」と私が提案すると、スタッフのひとりが即座に段ボールの中に新聞紙を袋状に作ってくれた。袋ごと出して燃やせばいい。お蔭でトイレのトラブルは殆どなかった。駐車場係りの奮闘も然り。

デジタルの時代にチラシは表も裏も手書きで、2000枚のきれいなチラシが出来上がったのが7月はじめ。インターネットには原則として流さず、クチコミとちらしだけの宣伝にしようと思った。キャンプ場は狭いし、駐車場も少ないし、スタッフが来てくれないような祭りにはしたくなかった。たくさん集まらなくてもいいと思ったのだ。チラシもけちけち(?)一枚一枚大事に渡していた。

ところが、祭りまであと一ヶ月というときになって、どうやらこの祭りがエライ評判になっていて、インターネットにも流れているし、あちこちから続々集まってきそうだという噂が聞こえてくる。どうしよう?「ひとつ釜のめし」をうたい文句にしたけれど、何百人ものご飯は炊けないし、お米はどのくらい用意したらいいのだろう?駐車場に停めきれない車が通行の邪魔になって通報されたら?テントを張る場所もなくなったら?などなど不安が募って、小心者の私は夢にまでうなされる始末。そんな時麻ちゃん「適正規模のことしか起きないから大丈夫!」ときっぱり言い切ってくれた。

結果的には予想の何倍も人があの狭いキャンプ場にすっきり包み込まれ、うまく調和して四日間を過ごせたのだが、それは集まってきた人たちがかなり熟練の祭りびとが多かったからか、初めて参加した人たちも何か求めるものがあって来ていたからか、過密なはずなのに少しも息苦しくなく、暖かい空気が流れる空間だったと思っている。この祭りで人生が変わったという人もいたらしい。

振り返ってみるとこの祭りはかなりグレードが高かったと自慢できる。マーケットに並んだお店もおしゃれで本物ばかり。無農薬の八百屋、手打ちうどん、石窯ピザ、キビご飯のお粥、チベット人の作る本格もも、グアテマラ人のマヤナッツ、などなど書ききれない。ステージは、この祭りが張り初めだという26フィートの新品ティピーがピンと張られ、大鹿の20代の若者たちが中心になって頑丈な足場が組まれた。そこで繰り広げられるプログラムは、毎朝ふたりの絵描きが交替で大きな板にペンキで手書きされ、トーク用のマイクはソーラーパネルでまかなわれた。キャンプファイヤーには上等な薪が積まれ、毎日誰かが斧で丸太を割っていた。救護ティピーでは快医学の手当てや、アイロン療法が施され、

炊き出しにはたくさんのお米と新鮮な野菜のカンパが届けられ、浜松から新鮮な魚が届いた時には魚を上手にさばいてくれる人が現れたり、女性ばかりでなく力持ちの男性たちが大きな鍋で上手に料理して、みんなのお腹を満たしてくれた。夜中に酔っぱらってケンカする人もいなかった。

音楽もすてきな空間を作ってくれたけれど、ためになるトークもたくさん聞けた。ステージでは音楽とトークが交互に登場し、トークのときにもステージ前で真剣に耳を傾ける姿が多かった。おえまさのりさんの「60,70年代のアメリカ」の映像と話は興味深かったし、チベットの友人の逃避行の話はリアルだった。「大震災以降の日本で生きるには」というテーマで話してくれた守田敏也さんと自ら福島で被災しながら快医学で被災者を救護している橋本俊彦さんのお二人は出会えたことを喜んでくれた。そこに自然エネルギーにも落とし穴があると訴える山田征さんと福島告訴団の武藤類子さん、富田貴史さん、中山康直さんが加わり、さらには7ジェネレーションウォークの一行が合流し、最終日には、ポップ、サワ、アキなど祭りびとの先達が勢ぞろいし、群馬のみこし群団が繰り出しておおいに盛り上がった。

去年の大震災のあと、どうやって生きていこうと悩みながら日常生活を過ごしてきた私たちが、こうして一堂に会し、知恵を出し合ったり、非日常の中で自分を見つめ直したり、気の置けない友人たちとの再会、初めての人との出会いを共有し、自分を表現できる祭りの空間はとても貴重な宝物だと思う。守田敏也さんがトークの最後に「内部被曝してしまっても、悲観したりあきらめたりせず、毎日を楽しく有意義に過ごすことが免疫力を高める」と言われ、まさにこういう祭りをすることが正解なのだと思える。デモや署名集めもするけれど、こういう祭りは私たちの非暴力直接行動なのだ。こうして私は祭り仕掛け人を初経験して、既に霊界の人であるポンヤナオという往年の祭りびとが祭りを大事にする気持ちを少し理解した。ほとんど毎日祭りに顔を出してくれた保科さんが、最終日に「来年もやってほしい」と言ってくれて、会場中から大拍手。ヤッター!そして片づけのときに山の神さまから虹の二重丸を頂いてこの祭りは無事終わった。祭りに参加してくれた人達、食べ物とお金と働きを奉納してくれた人達、PA班、撮影班、そしてかかわってくれた人みんなに心から感謝。